

## 2000年 鳥取県西部地震の体験談

2000年（平成12年）10月6日に発生した鳥取県西部地震の体験談です。

今年（2026年）の1月6日にも、島根県：鳥取県で震度5強の地震が発生しました。

### 町長 A氏

町内各地から続々と寄せられる被害情報や救援要請を受けて、それに対する的確な指示、対応がままならず本部はパニック状態になりつつあったが、県の財政課長が本部に常駐しアドバイスをしてくれて本当に助かった。

また消防団長、議会議長など主だった面々が本部に詰め相談に乗って頂いたが、心強くて確かな対策につながった。家の裏山に亀裂が入っている何軒かに避難の要請を行ったが、言うことを聴いていただけない人があって、最後には拌み倒して避難していただいたことは忘れられない。

今でもよかった点として挙げられるのは

1. 災害廃棄物の受け入れを分別して行ったこと。
2. 福祉のまちづくりが奏功して、独居高齢者などの安否確認がスムーズに行われたこと。
3. 県の支援体制が素晴らしかったことと、近隣町村との連携を図って支援策の調整をとったこと。
4. 基金をすべて取り崩し被災者支援の姿勢を明確にした。いざというときに頼りになる職員  
の存在は、住民にとって頼もしく以後の協働の町づくりの礎となった。

注意すべきこととして

1. 災害対策専門の人材が行政にも地域にも養成されていなかったこと。
2. 災害に対して行政も住民も準備不足、平素の訓練不足を痛感した。
3. 情報通信について基盤整備と複数の手段を構築しておく。

などである。

年の経過とともに被災経験は薄れていくので、防災訓練の実施と弱まっている地域コミュニティを再編強化して、互助機能が働く地域づくりが課題である。

生涯に一度あるかないかの大地震に遭遇したが、全国から支援を受けみんなが協力して繁栄する南部町を作って来たことを誇りにして、油断大敵、用意周到、自立連携を、町づくりの中で確実に後世に伝えていく義務があると考えている。

## 社会福祉協議会 B氏

平成12年10月6日、当時の西伯町社会福祉協議会として震災後にまず行ったことは、民生児童委員・地域福祉委員・愛の輪協力員といった地域のボランティアに協力いただき、一人暮らしの高齢者、要介護高齢者、障害者など要援護者の避難誘導・安否確認だった。

社協のデイサービスセンターでは、専門の看護・介護職員によるケア付の特別避難所として、介護保険サービス業務を休止し、避難の必要がある要援護者を社協の車で搬送。24時間ケアしながらの監視体制を3交代で回し、実避難者96名、延べ572名の対応を行った。この時、まず身体状況の確認、次に家屋の被災状況、更に内部の生活環境の確認といっぺんに十分な確認をせず、何度も同じ家に何人もが訪問するというような状況もあり、要援護者の安否確認が非効率であった。

さらに社協では一人暮らし高齢者の把握はできていたが、高齢者夫婦世帯や介護保険サービス利用者以外の要援護世帯の把握は十分でなく、通常より災害時の要援護者情報をどう共有してどう対応するかが課題として残った。自治会や自主防災組織で各世帯の状況把握を日頃からしておき、地域住民による安否確認・避難誘導がスムーズに行えるシステムを作っておく必要があると思った。また、当時は、地元の人との連絡も電話に頼るしかなく、電話がつながらなかったりして連絡にとまどった。

震災後に町内でたくさん自主防災組織が立ち上がったが、日頃から防災意識を高め、防災訓練等を実施するなど、いざという時に機能することが大事であり、情報の伝達をスムーズにするため、双方向からの情報のやりとりができるような情報伝達体制の整備が求められると思った。

もう一つ社協として対応したことに、災害ボランティアセンターの運営がある。震災後しばらくは特別避難所の運営で手一杯だったので、県社協の支援により、災害対策本部の一部として災害ボランティアセンターが立ち上がった。災害対策本部で活動に必要な資材などを確保してもらい、公設民営方式のやり方で、行政と連携を取りながらボランティアの活動調整を行い、特別避難所を閉所した後に町の社協が運営を引き継いだ。刻々と変化するニーズに対して何が必要なのか、どんなボランティアが必要なのか情報収集し、発信し、情報提供と共有を行わないと無駄が多くなったり、的確な支援に結びつかない。ボランティアの理解を深めるためにも、災害ボランティアセンターは、被災者の生活課題を的確に把握することが最も重要である。

ボランティア、行政、機関、団体の日頃からのネットワークが大切で、自分で自分を守る自助を基本に、普段の生活の中で隣近所の助け合い・支え合いの精神を醸成し、日頃から住民の手で、お互い助け合う地域づくりをしていくことが大切であると痛感した。

## 保育所長 C氏

あの未曾有の大地震から6年が経とうとしています。たいへんな状況の中、保護者、地域の皆様と職員が一体となり、子どもたちの命を守ることができたことを、心から感謝しています。

まさに大地震でした。わたしたち職員は、突然地の底から突き上げてくるような激しい揺れ、いつまでも続く余震に、一瞬「何事だ。この世の出来事か」と疑う状況でした。子どもたちは各保育室で昼寝中でした。遊戯室の防煙用ガラスが落下、床に散乱して非常に危険な状態の中、職員は必死で子どもたちを布団ごと机の下に引き入れ、名前を何回も呼び起こし、人員点呼するとともに、不安がる子どもを励ました。地鳴りとともに、何度も起きる余震に子どもたちは、机の下で恐怖におののき、すすり泣く声がしていました。

子どもたちを避難場所にいつ誘導するのか、ずいぶん考えました。園庭は狭く、いろいろな遊具や鉄柱などがあり、タイミングが悪ければ命にかかわると思っていました。一時間ほど過ぎた頃から、多少余震が少なくなったのをみはからって、0、1、2歳児は避難車に乗せ、3、4、5歳児は徒歩で園庭に集まり、近くの病院の駐車場に避難しました。その間、病院が停電になったため、電源を確保するため重症患者数名が当所に避難してこられました。

地震発生直後から、数人の保護者が駆けつけてくださり、たいへん勇気づけられました。また、避難先では、患者さんや病院職員の皆さんが大勢おられて、「皆と一緒にんだ」という安心感をえました。

時間の経過とともに、次々と迎えに来られ、全員無事保護者にお渡しできたとき、「本当にみんな無事でよかった」と、涙が止まりませんでした。少しでも間違えたら何が起きても不思議ではなかった状況でした。

今回の体験から、人間は自然の中で生かされていると実感しました。だからこそ、人間同士の支え合いとつながりが大切だと感じました。21世紀を生き抜く子どもたちが、この体験を忘れることなく、命を尊び、心豊かに人とのつながりを大切に、たくましく成長してほしいと願っています。

## 消防団長 D氏

平成12年10月6日午後1時30分、鳥取県西部を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生し、日野町は震度6強により町全体が多大な被害を被りました。大災害にもかかわらず一人の死者もなく、また火災が発生しなかったことは不幸中の幸いでした。

地震発生当時、消防団員の大半が町外での仕事で、また町職員においても出張者が多く、私も隣接の江府町で今までに経験したことのない震えに遭遇し、速やかに帰町し、発生5分後に設置された災害対策本部に詰め指揮をとりました。

サイレン及び防災無線などにより団員を招集し、第一、第二、第三と召集を行い、これに呼応して指定場所に集結しました。

団員77名中約15名、時間の経過とともに仕事先から帰ってきて集合してくれて、団員も増えてきました。

第一、第二、両副団長指揮のもと、午後1時45分に初動体制に入りました。被害状況等確実な情報を収集するよう、また自主的避難の呼び掛け等指示を出し、また各自治会に住民の安否確認及び被害状況を流すよう防災無線で促しました。住民からも次々と情報が寄せられ、2件の人的被害発生の情報により、広域消防と連携し救出に向かい、両方とも無事救出できました。雨が降るとの情報もあり、ブルーシートの確保（約1,500枚）等、財産保護にも努めました。

消防団の使命は、第1が人的災害救助活動、第2が財産保護のための活動です。そのためにも、早く確実な情報を収集すること、少ない体制ながら精一杯の努力をしましたが、なにせこれだけの大規模な災害にあって、住民の皆さんの様々な要請に対し、速やかに且つ十分な対応ができなかったということが残念でなりません。このような状況下では、人的救助を優先せざるを得ません。さらに、団員を効率的に動かすためには、なによりもまず確実な情報が必要となります。

災害が発生したときには、一人ひとりが慌てず、適切な行動を取ることが必要です。そのためにも、日頃から関心を持って正しい心構えを身につけておくことが必要です。ぜひ家族会議で、家の中ではどこが安全か、幼児やお年寄りの誘導、避難場所と経路の確認、救急品等のチェック、家族間の連絡方法など、時間帯や季節による違いも考えて相談しておいてください。また、「自分の町は自分たちが守る」という意識を持って、住民一人ひとりがきめ細かい活動をすることが重要です。このことが自主防災組織の始まりとなるものです。

近年、社会情勢の変化により、消防団は団員数の不足や高齢化等により活動に支障が出ています。本町も同様であり、さらに、町外へ通勤する団員が増加したことにより、昼時間の団員数が極めて少ないという状況です。よって各自自治体において自主防災組織を充実させ、消防団員との連携を密にすれば、災害に強い町を築く事が出来るのではないのでしょうか。

また、全国的には女性消防団員が増加傾向にあり、1万5千人が女性特有のきめ細かさを生かして活動中です。本町でも女性団員が入団され、自分の町を守る新しい原動力になっていたきたいと願っております。

出典：「鳥取県ホームページ 鳥取県の危機管理」より抜粋

[https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/127409/WestTottoriPrefEarthquake3\\_03\\_experiment.pdf](https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/127409/WestTottoriPrefEarthquake3_03_experiment.pdf)